

1年次の見学実習体験が作業療法学生の認知症高齢者に対する不安と知識に及ぼす影響

松谷信也¹⁾ 上城憲司¹⁾ 原口健三¹⁾

要旨 本研究の目的は、1年次の見学実習体験が作業療法学生の認知症高齢者に対する不安と知識に及ぼす影響について示唆を得ることであった。主な調査内容は、認知症高齢者に対する不安の有無と認知症に関する知識（尺度を用いた調査と主観に基づいた調査）とした。その結果、不安の有無に関する調査では、実習前後に有意差は認められなかったが、23.3%の学生において実習前「不安がある」から実習後「不安がない」に回答の変化があった。一方、認知症に関する知識調査では、尺度を用いた調査において実習前後に有意差は認められなかったが、学生の主観に基づいた調査においては、実習を通して知識が「増加した」と回答した者が「増加しなかった」と回答した者に比べ有意に多かった。これらの結果から、見学実習の体験は、本来の実習の目的に加え、認知症高齢者に対する不安と知識についても若干の影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

Key words : 見学実習, 不安, 知識

I. はじめに

認知症高齢者が増加の一途を辿る中¹⁾, 作業療法学生が認知症を正しく理解し, 過度な不安をもつことなく認知症高齢者と接することができるようになることは, 作業療法教育を行う上で重要である。

作業療法教育の中でも学外で行われる実習は, 認知症高齢者を含めた様々な患者と実際の関わりがもてる場であることから, 学内の授業や演習では得ることが難しい多くのことを学ぶことができる。特に1年次に実施する見学実習は, 作業療法学生として初めて認知症高齢者と接する可能性がある実習であることから, 本来の目的である作業療法の業務等を理解することに加え, 実習前に抱く漠然とした不安が軽減し, 認知症に関する知識が深まるのではないかと考えられる。

筆者らはこれまでに, 1年次の見学実習体験が社会人基礎力に及ぼす影響について検討を行っており, 社会人基礎力は実習前に比べ実習後に概ね低い値を示し, 仮説に反して高まらない可能性があるという示唆を得ている²⁾。しかし, 見学実習体験が認知症高齢者に対する不安や知識に及ぼす影響については検討できてお

らず, その影響については明らかになっていない。また, 筆者の管見によると, 作業療法学生を対象とした1年次の見学実習については殆ど検討が行われておらず, 3年~4年次の実習に関する調査に留まっているのが現状である³⁻⁶⁾。

そこで本研究では, 1年次の見学実習体験が作業療法学生の認知症高齢者に対する不安と知識に及ぼす影響について示唆を得ることを目的とし, 実習前後における不安と知識の変化について検討を行った。見学実習体験が認知症高齢者に対する不安と知識に及ぼす影響について示唆が得られることは, 作業療法教育における実習の効果を検討する際の一助になると考える。

II. 方法

1. 対象

対象者は, 作業療法学専攻の大学1年生30名(女性16名, 男性14名)で, 年齢の平均は 18.9 ± 1.4 歳であった。

2. 見学実習

見学実習の目的は, 実習指導者の指導のもとで見学

受付日: 令和元年10月1日, 採択日: 令和2年2月1日

1) 西九州大学 リハビリテーション学部

〒842-8585 佐賀県神埼市神埼町尾崎4490-9 TEL: 0952-37-9320

を中心とした実習を行い、作業療法の業務やコミュニケーション能力の重要性などについて理解することであった。実習の課題は、見学した対象者の疾患や治療内容、作業療法士やその他の職種の役割や連携などについてまとめることで、実習後には学内でセミナーを実施し、実習の課題を中心に実習で学んだ様々なことについて集団討議などを行った。実習の時期は入学から10か月が経過した2月初旬で、実習期間は5日間であった。また、実習施設は医療施設から介護老人保健施設まで幅があり、領域についても身体障害から精神障害まで様々であった。なお、学生の配置は1施設に1名であった。

3. 調査内容

調査内容は、認知症高齢者に対する不安の有無、認知症に関する知識、認知症高齢者との接触の機会とした。認知症高齢者に対する不安の有無は、「認知症高齢者と接することへの不安」について「とても不安がある」「やや不安がある」「あまり不安がない」「全く不安がない」の4つの選択肢から1つを選ぶこととし、実習前後のそれぞれにおいて回答を得た。

認知症に関する知識については、知識を測定する尺度を用いたものと、学生の主観に基づいた知識の変化に関するものの2つの調査を行った。1つ目は、金ら⁷⁾が作成した15項目から構成される尺度を用いた。この尺度は、認知症に関する一般的な知識(3項目)と認知症の症状、特に行動・心理症状および症状の対応方法(12項目)から構成されており、正答の場合は1点、分からない又は誤答の場合は0点とした(1項目1点の15点満点)。得点は高いほど認知症に関する知識を持っていることを示している。本研究では、実習前と実習後の合計得点について比較を行った。2つ目は、知識に関する学生の主観的な変化を検討するために「実習を通して認知症高齢者に対する知識は増えたと思うか」という質問を実習後にのみ行い、「とても増えた」「やや増えた」「あまり増えなかった」「全く増えなかった」の4件法から回答を得た。

また、実習中における認知症高齢者との関わりの度合いを把握するため、実習中の認知症高齢者との接触の機会について調査を行った。接触の機会については「とてもあった」「ときどきあった」「あまりなかった」「全くなかった」の4件法から回答を得た。

なお、調査を実施した時期は実習開始の約1か月前と、実習終了後3日目で、調査用紙は一斉に配布し、

一斉に回収した。

4. 倫理的配慮

対象者には研究の目的や、参加を中断・拒否しても不利益がないこと、プライバシーが厳重に守られること等を説明した後、同意が得られた者を研究の対象者とした。

5. 分析方法

認知症高齢者に対する不安の有無については、「とても不安がある」「やや不安がある」を「不安がある」、「あまり不安がない」「全く不安がない」を「不安がない」とし、実習前と実習後のそれぞれの回答者数とその割合を算出した。また、実習前と実習後の回答者数の変化について McNemar 検定を用いて分析を行った。

次に、尺度を用いた認知症知識については、実習前後のそれぞれにおける合計得点の平均値および中央値を算出し、実習前と実習後の合計得点の差について Wilcoxon の符号付き順位検定を用いて比較を行った。一方、学生の主観に基づいた知識の変化については、「とても増えた」「やや増えた」を「増加した」、「あまり増えなかった」「全く増えなかった」を「増加しなかった」とし、回答者数とその割合および増加の有無の差について χ^2 適合度検定を用いて分析を行った。

なお、実習中の認知症高齢者との接触の機会については「とてもあった」「ときどきあった」を「接触の機会があった」、「あまりなかった」「全くなかった」を「接触の機会がなかった」とし、回答者数とその割合を算出した。

全ての統計処理には SPSS Statistics version19 を使用し、有意水準を 5% とした。

III. 結果

認知症高齢者に対する不安の有無について、実習前に「不安がある」と回答した者は22名(73.3%)、「不安がない」と回答した者は8名(26.7%)であった。一方、実習後において「不安がある」と回答した者は18名(60.0%)、「不安がない」と回答した者は12名(40.0%)であった。本研究では、実習前後の不安の有無について有意差は認められなかったものの($p = .344$)、30名中7名(23.3%)の学生において実習前「不安がある」から実習後「不安がない」へと回答の変化があった(表1)。

表1 見学実習前後における認知症高齢者に対する不安の有無

		実習後		p
		不安がある	不安がない	
実習前	不安がある	15	7	.344
	不安がない	3	5	

McNemar 検定 単位：人

表2 見学実習前後における尺度を用いた認知症知識の比較結果

	実習前	実習後	p
合計得点	11.0 (9.3, 12.0)	11.0 (9.3, 12.0)	.155

Wilcoxon 符号付順位検定 単位：点
中央値 (25%タイル, 75%タイル)

表3 見学実習後における学生の主観に基づいた知識の変化

	知識が増加した	知識が増加しなかった	p
	22	8	.011

χ^2 適合度検定 単位：人

次に、尺度を用いた認知症知識について、実習前後における合計得点の比較結果を表2に示した。実習前の合計得点の平均値±標準偏差、および中央値（四分位数）は、10.5点±2.3点、11.0点（9.3点～12.0点）、実習後は11.0点±2.1点、11.0点（9.3点～12.0点）で、実習の前後において合計得点に有意差は認められなかった（ $p=.155$ ）。他方、学生の主観に基づいた知識の変化については、実習を通して知識が「増加した」と回答した者が22名（73.3%）、「増加しなかった」と回答した者が8名（26.7%）で、実習を通して知識が「増加した」と回答した者は「増加しなかった」と回答した者に比べ有意に多かった（ $p=.011$ ）（表3）。

なお、実習中の認知症高齢者との接触の機会について「接触の機会があった」と回答した者は25名（83.3%）、「接触の機会がなかった」と回答した者は5名（16.7%）であった。

IV. 考察

本研究の目的は、1年次の見学実習が作業療法学生の認知症高齢者に対する不安と知識に及ぼす影響について示唆を得ることであった。その結果、不安の有無に関する調査では、実習前後に有意差は認められなかったものの、23.3%の学生において実習前「不安がある」から実習後「不安がない」に回答の変化があった。一方、認知症に関する知識調査では、尺度を用いた調査において実習前後に有意差は認められなかったものの、学生の主観に基づいた調査においては、実習を通して知識が「増加した」と回答した者が「増加し

なかった」と回答した者に比べ有意に多かった。これらの結果から、見学実習の体験は、本来の目的である作業療法の業務等について理解を深めることに加え、認知症高齢者に対する不安と知識についても若干の影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

不安の有無と尺度を用いた知識調査において、実習の前後に有意差を認めなかったことについては、実習期間が短いことや実習内容が基礎的であったことが要因として考えられた。見学実習は実習期間が5日間と短く、実習指導者の指導のもとで見学を中心とした実習を行い、作業療法の業務やコミュニケーション能力の重要性などについて理解することが主な目的である。したがって、本研究において8割以上の学生が実習中に認知症高齢者と接する機会があったと回答しているものの、認知症高齢者と直接深く関わる機会は限られており、そのため認知症高齢者に対する不安を払拭し、知識尺度で問われている認知症の症状や対応方法を具体的に理解するまでには至らなかったのではないかと推察された。

一方、実習後に主観的な知識が増加したと回答したものが有意に多かったことについては、認知症高齢者との実際の関わりを通じた学びに加え、実習指導者からの臨床に即した知識の教授などが影響したと考えられた。坂本⁸⁾は、実習指導者による知識の教授について、学生は知識と技術に関しては主として症例に関連させた指導法を期待しており、実習指導者は基礎医学に基づいた知識と技術を臨床に結びつけ、学生に教授している可能性があると述べている。今回の見学実習においても、実習指導者の臨床場面の見学を通じた多くの学びが学生の主観的な知識の増加に影響したと考えられた。

V. 本研究の限界と課題

本研究の限界は、対象が一学年のみと少なかったこと、尺度を用いた認知症知識調査が1種類であったこと、実習指導者による指導内容や認知症高齢者の認知機能の程度などについては同一であったとは言い切れなかったことであった。

今後はこれらの点について再検討した上で調査を継続すると共に、2年次以降の各実習についても調査を行い、作業療法学生の認知症高齢者に対する不安と知識の経時的な変化についても検討することが課題である。

VI. 結 論

見学実習の体験は、本来の実習の目的に加え、認知症高齢者に対する不安と知識についても若干の影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

引用文献

- 1) 征矢野あや子：認知症のある高齢者の転倒予防. 日本転倒予防学会誌1, 2014: 17-21.
- 2) 松谷信也, 木村まり子, 玉利誠・他：1年次の見学実習が社会人基礎力に及ぼす影響－作業療法学科学生を対象とした検討－. 柳川リハビリテーション学院・福岡国際医療福祉学院紀要11, 2015: 24-27.
- 3) 安田大典, 飯山準一, 白濱勲二・他：臨床実習前後における学生の気分状態と自己評価との関連性. 日本作業療法研究学会雑誌15, 2013: 1-9.
- 4) 西田津紀子, 西村良二：精神科病院における臨床実習が作業療法学生に与える影響. 医学教育46, 2015: 431-435.
- 5) 安部征哉, 元村直靖：作業療法学生の臨床実習における社会スキルについての検討；Kiss-18を活用して. 大阪教育大学紀要57, 2008: 41-47.
- 6) 立石恵子, 立石修康：作業療法学科臨床実習における学生の抑うつとストレスコーピング. 九州保健福祉大学研究紀要7, 2006: 173-176.
- 7) 金高間, 黒田研二：認知症の人に対する態度に関連する要因－認知症に関する態度尺度と知識尺度の作成－. 日本社会医学会28, 2011: 48-56.
- 8) 坂本年将：臨床実習における知識, 技術, 人間関係の指導に対する学生の意識－アンケート調査より－. 理学療法学19, 1992: 585-591.